

---

# 人柱アリス

ラリ瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人柱アリス

### 【Nコード】

N3530M

### 【作者名】

ラリ瑠璃

### 【あらすじ】

5人のアリス達の話。ムシャクシャしてやった。後悔はしていない。…無許可の上に本作を遙かに下回る代物です。それでも良いという方だけに閲覧をお薦めします。

赤のスペード

一番目アリスは勇ましく

剣を片手に

…不思議の国

赤いアリスは歩いた。

茨を切り裂き、道を創るのは  
アリス本人。

それは赤のアリスの夢。

アリスはそれが夢だと分かっていた。

だから、アリスは楽しんだ。ありったけ、躊躇う必要なんてどこにも無かった。

夢の中のアリスはとても強くて。

右手にスペードのマーク。

どんな物にも打ち勝てた。

それは、夢だった。

切り開いた赤い道。

自分が今までに何を切り捨ててきたのかは、曖昧で分からない。

夢らしい夢。ただあるのは、強者としての快楽。

陶醉する、優越感。

アリスの指に、森の茨が絡んだ。

赤い瞳が大きく見開く。

振り払おうと、

必死にもがく。

が、

茨は強固になるばかり。

アリスは初めて自分の剣を省みた。

鮮血滴る、赤のアリスの剣を。

絡まる、絡まる、茨。

遅かった。

アリスは、罪人の如く茨に閉じ込められ

…赤い道が残った。

一番目アリスは勇ましく。

剣を片手に、不思議の国。

色んな物を切り捨てて。

真っ赤な道を敷きました。

赤のアリスは、もう目を覚ましませんでした。



## 青のダイヤ

二番目アリスは大人しく

歌を歌って

…不思議の国

青いアリスは歩いた。

美しい歌を口ずさみながら。

アリスの声は綺麗で、沢山の人がもてはやした。

響くのは自らの美声。

アリスはそれが夢だと分かっていた。

夢の中のアリスは歌が上手くて。

楽しくて嬉しくて、たくさん歌を歌った。

誰もがアリスの声を綺麗だと言った。

手を叩き、笑い、時には涙を流し、アリスの歌を認め 誉め称えた。

アリスは歌った。

歌い続けた。

誰かに認めて貰える、快感。

自分は今注目と憧れの的。

歌などどうでも良かった。

群集の賛美が欲しい。

青のアリスの声に、誰もが聞き惚れ、羨んだ。

それは青のアリスの現実。

変わる事無い真実。

青のアリスは夢を忘れた。

ダイヤの右手。

歌い、歌う。

好きでもない歌を。

注目と、もてはやされる快感のために。

群集から、光る銃口。

その先には青のアリス。

逃げられない。

掠れた声で叫んだ。

周りには邪魔な人間ばかり。

その誰もが、アリスを愛していた

こめかみに宛行われた、冷たい金属。

青い瞳が恐怖に揺れた。

群集の1人、狂気の男。

引き金は引かれ、アリスは

いかれた男に、撃ち殺されて。

…真つ赤な薔薇が咲いた。

二番目アリスは大人しく。

歌を歌って、不思議の国。

いろんな音を溢れさせて、狂った世界を造りました。

青のアリスが目覚めることはありませんでした。

緑のクローバー

三番目アリスは幼い子

きれいな姿で

…不思議の国

緑のアリスは歩いた。

綺麗な姿を魅せ付けながら。



アリスはそれが夢だと分かっていた。

夢の中のアリスは美しくて。

おもしろいほど人々を魅了した。

夢の中、緑のアリスは王女になりたかった。

言うことを聞く大人達。

とても面白い。

手の甲にはクローバー！。

アリスは人々を魅了した。

楽しくて。

沢山の人を惑わせた。

アリスが言うまでもなく、国ができてゆく。

女王は緑のアリス。

それはアリスの夢だった。  
夢の中の夢。

いつでも、思い出す。狂った夢。

すべてがすべてが狂ってゆく。酷く湾曲して。

崩壊し、朽ちてゆく自分に。  
狂ってゆく毎日に、怯える。

壊れ、る…

壊れていく。何もかも。

国も城も出来上がった  
仕える者もたくさんいた。

緑のアリスは、城の女王。

たくさんのお使い。

…  
でも

三番目アリスは幼い娘。

綺麗な姿で不思議の国。

いろんな人を惑わせて。

おかしな国を造り上げた。

緑のアリスが目覚めることはもうありませんでした。

森の小道を辿ったり

森の小道を辿ったり

薔薇の下でお茶会

お城からの招待状は

ハートの、トランプ

それは二人の夢だった。

性別の違う双子。

二人は赤い道を辿っていた。

『ねえリン？』

少年の方が口を開いた。

不安を隠しきれない様子だ。

『今日の夢は、何だか…おかしくない？』

明らかに不満そうに少女は答える。

『そんな事無いよ！』  
少年の肩が跳ねた。

『…り、リン？』

『なに』

彼は姉の様子を窺う。

『…怒ってる…の？』

『当たり前でしょ！？』

彼女は赤い森を見渡した。

『じじは夢の中なんだから。夢の中くらい、楽しんだって良いはずよ』

間違いでは無い、彼女の主張。

はつきりと否定することが出来ずに、レンは曖昧に生返事を返した。

『…この道は、どうして出来たんだろうね？レン』

『…へ？ …何が？』

気分の変動が激しい姉についていけない。

『この赤い道。誰かが作ったからあるんでしょ？』

『あ、そういうことか』

辺りを見回す。

赤のフィルムを通して眺めたような景色。

正常なリンの姿だけが、それが夢そのものの色でないことを確認させる。

『…夢だから、これはボクらの想像だよ。製造者なんていない』

強いて言うなら、自分自身。

『つまんないよそんなの』

なんだそりゃ、

『きつと赤の人が作ったのね、この森。あたし達は黄色だからね』



姉の妄想を聞きながら、再びレンは生返事を返した。

この森を創った人がいるのなら、

きっと、頭のおかしい人だろう。

この道は、鮮血のように赤い。

そんな訳は無いのだけれど。

これは自らの夢なのだから。

ほかの誰でもない。

ましてや 誰かに見せられてだっていない。

小さな夢だ。

薔薇の木の下でお茶会

二人双子は薔薇の下。

テーブルクロスにティーカップ。

青い薔薇に見下ろされ  
少女は満足空仰ぐ

参加者は、二人だけ。

…他には誰もいない。これは二人の夢なのだから。

『レン？』

リンの機嫌は良さそうだ。

姉がこうだと、レンも気が楽である。

『ん？』

『きれいな薔薇ね。青い薔薇なんて初めてよ』

確かに

現実には青い薔薇なんて存在し得ない。

夢だから有り得る事なのだろう。

『今日の夢は楽しいわ』

… そうだろうか。

どうにも、レンにはただのファンタジックな夢には思えない。

リンは平気かも知れないが、この狂気的な夢を見ていると

いつか自分の頭までイカれてしまいそうだ。

『…ボクは、早く目覚めたいけど』

レンの言葉を聞いて、先程までうつとりと景色を眺めていたリンは、キッと彼を睨んだ。

『どっして』

『だ、だって…こんな夢イカれてるよ』

多少たじろぎながら、それでも使命的に制止を掛ける。

『幾らイカしてたとしても夢は夢よ。覚めない夢なんて無いんだか  
『う』

拗ねたような口振りで言った。

『…そうだけど』

確かに夢は覚めるものだ。

分かっている。

ただ、嫌な感じが付き纏っていて、居ても経ってもいられないだけ。

『優雅なお茶会なんて夢以外じゃ出来ないもん』

『お茶会って…、ボクたちしか居ないよ』

『いいの』

リンは聞き入れようとしない。

レンの中にある不安は時が経つほどに膨らんでゆく。

ひどく歪み淀んだ其れの正体は知れない。

ただ、

レンは怖かった。

その醜い物が、リンもろとも自分自身を押し潰して仕舞うようで。

もし例え自分が壊れてしまっても、最悪リンが無事なら

それなら、幾らもマシだから

…だから、早く、止めにしたい。こんな危険な綱渡り間違ってる。

『リン…』

『嫌よ』

奮めるように言ったレンを問答無用で否定する。

レンは半分諦めの溜め息をついた。

幾ら言っただってこの姉は聞かないのだ。解っているじゃないか。

レンは青い薔薇の木を見上げた。

その中に一輪だけ、深紅の薔薇。

『……………リン？ あれ……………』

『>?』



リンも頭上に目を向けた。

『あのバラだけ赤いよね？』

『…あ、ホントだ』

一面、毒々しい程に青に塗り潰された薔薇の花の中に、一輪だけ、一際大きな深紅の薔薇が咲いている。

『きれいね、レン？』

『…え？ …ああうん』

特に否定する理由もないので頷いておく。

実際、レンにはそれを綺麗だと思うことは出来なかった。

埋め尽くす青の中にぼつんと有る赤は、弾丸を撃ち込まれた後の銃創を彷彿とさせる。

血が滴ってもおかしくない位。

もし、この薔薇の木に植え付けた主が居るのなら、

あの森のように、もし居たならと仮定して考えるなら

やっぱりこれも、正常な精神状態で造られたわけでは無いと思う。

こんな

狂気的な碧の薔薇なんて。



お城からの招待状は（前書き）

… なんだかリンの口調が定まりません

お城からの招待状は

『 レン！…レン！…！』

威勢の良い声が彼を呼んだ。

それと共に迫ってくるちいさな足音。

『…なんだよ』

『見て！これ』

そう言って顔の前に掲げられたもの

近すぎてピントが合わないので、仕方無く後ろに下がる。

高級感のある小綺麗な封筒。

珍しい緑の蠟で封をしてある判のマークは、簡潔なトランプのクローバー！。

未開封だった。

宛名は「顔も知らぬ双子様」。

「差出人は……」

と、封筒の表面をなぞっていたレンの眼が、目尻が裂けんばかりに見開かれた。

『ね？もつびっくりでしょ！？』

差出人は

不思議の国の、女王。

「私の城にご招待致します。敬愛と歓迎の意を込めて。」

綺麗な字でそう綴られていた。

『…これ、招待状だよ』

『分かってるよ』

むくれたように言うリンだったが、確かにそこまで無知では無いだろう。

それよりも、レンには封が開いていないことが不思議でならない。

『どうして開けないの?』

姉は、当たり前のように、そして無邪気に言った。

『あたし、レンと一緒に見ようと思ったから!』

どき、なんて。

頬が火照ってくるのは気のせい。



『…そ、そこ』

レンは目を逸らして封に手を掛けた。

リンの爛々と輝く期待の眼差しが、レンの手元に降り注ぐ。

ペリ、と軽い音がして。

緑の蛹が剥がれた。

『…？ …手紙じゃない、何だろう？』

中を覗いたレンが、不思議気な顔で中味を取り出す。

『なに？ 何が入ってるの？』

『…これ』

取り出されたのはトランプカード。

黄色いハートの、エースだった。

『トランプ？』

『…そうみたいだね』

リンが首を傾げた。

『どうしてトランプなんかが入ってるのかな』

『 ちゅあ… 』

レンに分かるはずもない。  
同様に首を傾げるしかなかった。

高貴な女王様の小洒落たお誘いだろっか。

…どうにも、レンにはそっぴい立場の人の気は理解できない。

正直な所、城なんていう気を使う所には行きたくないというのが  
真実だ。

…なんて、双子の姉に訴えても聞く耳は持たないのだろう。

…仕方ない。

分かり切っているのだ、そんな事は。

初めから聞き入れて貰えるなんて思っちゃいない。  
自分は黙って付いて行くだけだ。

『まあ、良いじゃない、せつかくのお誘いなんだもん。お邪魔  
しましよつよ』

…ほら、乗り気だ。

レンとてこの少女と行動を共にして日が浅いわけではない。

自分の歳と同じだけ、付き合いも長いのだ。

『そうと決まったら早く行かなくちゃ！』

法案は可決。独裁主義っていうのは、どのパラレル上の世界でも一緒なんだろうか。

『ほら、レンー！ー！』

握手のように差し出された手は「手を繋ぐ」為の物だ。

お決まりのようにレンも手を出したが、

『…あれ、リン？ …その手、どうしたの』

右手の甲。

『……へ？何？』

そう言っつて、差し出した掌を翻す。

『…何…これ』

リンが見たのは、黄色のハート。

咄嗟にレンも自らの甲を見た。反射的に鏡の、左の手を。

『…っ！？』

やっぱり刻まれていたハートのマーク。

刺青のように、引っ掻いても取れない。

…やられた。

そんな感じがした。

何がどうやられたのかはレンにも分からない。

でも分かるのは、油断に付け入られたような感覚。

『…………もう、戻れない』

『… え？』

そう呟いていた。

『そんな気がするんだ。ボクらは戻れないって』

『…………どこに？ もと来た道？ 赤い森？ 青い薔薇？ …… それとも』



リンの言葉を遮るように、レンが手を握った。

ハッと、リンは弟を見上げる。

…レンは、笑顔で

『 行こうか、リン。 ダイヤの女王様の所へ 』

拍子抜けするのは、リンの番だった。

『…ね、レン？』

『ん？』

心配になる。

いつものレンじゃないような

『行きたくないの？レン』

彼女は首を振る。

そう言う訳じゃない。

行きたいけど、リンが気掛かりなのはそこじゃないのだ。

『…違うの。　　レン、あのね』

『じゃあ行くつもり』

喋らせてくれない。

ぐいっと手が引つ張られる。

リンは足がもつれながらも、付いて行くという選択しかなかった。

何でだろう

見慣れた後姿が 怖い

…でも城に行きたいのは事実だ。

リンの中で、好奇心が無制限に膨らんでいく。

それが危険を孕んだ物だという事は否定できない。

でも、

『…レン、この夢…変じゃない?』

リンは最初にレンが吐いた台詞を繰り返した。

「変だね」「そう言って、この楽しい夢が終わることを心の隅で望んで。」

『変? 夢は夢だよ。現実じゃない』

…レン？

あんたがそんな事言っの？

レンが言ってることはいつだって正しい。

いくら反抗しても、最後に頼りになるのはレンだ。

あたしは…レンが言っ事を信じていいの？

レンが信じる事を信じていいの…？

『夢なんだよ？ 楽しまなくちゃ』

…ゆめ？

…そう、

夢、なんだよね？

レンが言うなら

きっと 大丈夫。

あたしはレンが大好きで、レンのことは信じてるから

レンが言うことも、信じてる

いつだってレンは正しかった。

あたしは馬鹿だけど、レンは頭が回るから。

『 そうだね 』

ぎゅっ、とリンは弟の手を握り返した。



今度はリンが先導する番だ。

『行こっか、レンー！』

四番目アリスは、双子の子

好奇心から 不思議の国に…行きました

黄色のハート

四番目アリスは双子の子

好奇心から

…不思議の国

黄色いアリスは歩いた。

仲良く手を繋ぎながら。

ボク達はそれが夢だと解っていた。

夢の中はとても楽しくて。

2人なら楽しさは何倍にも膨れ上がった。

沢山の楽しいこと。

沢山の新鮮な刺激。

でも、ボクは気付いていた。

このままじゃいけない。

早く逃げなければ。

早く逃がさなければ。

リンが、危ない。

頭蓋骨の中で精神の軋む音。

早く 早く逃げて、リン。

ボクから、逃げて

『レン、この扉は何処に繋がっているのかしら!』

次々と開け放たれる扉。

次々と開ける世界。

その度に削られていく自我と自制心。

駄目だ、とめる。

『楽しいね！レン』

止める

『次はどこに繋がってるのかな？』

止める！！

『  
レ  
』

『駄目だ！！ リン！』

ギギギ、と、

唾然としたリンの手は、既に扉を開けていて。

叫んだボクの声は、既に手遅れで、

向こうに見えた世界は、狂気に満ちていて

『…レ、ン…?』

『…リン』

大好きだよ、リン。

この壊れた世界に君が破壊されて仕舞うなんて

そんなのは嫌だ。

だったら、簡単なこと。

リンは永遠にボクのも物だ。

『ネ、じつは、どうも……？』  
『リン』

『……リン……何言ってる……？』



壊されるくらいなら

ボクが、壊せばいい

一番アリスに近かった、双子の姉弟。

弟は姉を愛でた。

此処は幸せな、二人だけの世界。

…そつでしょ？…リン。

四番目アリスは双子の子。

好奇心から不思議の国。

いろんな扉を潜り抜けて。

ついさっきやってきたばかり。

黄色のアリスが目覚めることはもう二度とありませんでした。

不思議の国に迷い込んだ、不思議なアリス達の話。

これはそう、消えることが嫌だった小さな小さな夢の話。

…夢は、もっと大きくなりたかった。



## 黄色のハート（後書き）

長らくお待たせいたしました。サボりつつの完結です。

現在連載中の小説が一つ終わるといのは、それだけで精神面の負担が劇的に減少しますね。

…いや、こんなに短い作品であっても、です。

こんな原作のイメージを完全崩壊させる様なモノでしたが、最後まで読んでいただけるなんてただひたすらに感謝です。

最後の終わり方とか、至らない点は沢山有るかと思いますが、ひとまずは最終話までの愛読、本当にありがとうございます。

また二次創作を書くかどうかは分かりませんが、その際はどうぞ宜しくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3530m/>

---

人柱アリス

2010年10月12日09時55分発行